

## 「通訳性」の問題を考える：小島信夫『抱擁家族』 における三輪俊介の「通訳性」を中心に

趙, 正民  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/8350>

---

出版情報：九大日文. 1, pp.167-177, 2002-07-25. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会  
バージョン：published  
権利関係：



# 「通訳性」の問題を考える

——小島信夫『抱擁家族』における三輪俊介の「通訳性」を中心に——

CHOU Jung-Mi  
趙 正民

## I はじめに

まず、「通訳性」という言葉の意味を明確にしたい。

一般的に翻訳や通訳は、ある言語で書かれたもの（あるいは発話されたもの）の意味内容を損なわずに別の言語で表現するものとして理解されている。もちろん、「別の言語」の範疇には、例えば、日本語同士の間における言い換え、つまりヤーコブソンの「言語内翻訳」や、「記号系間の翻訳」（言語を言語以外の記号体系で表現すること）も含まれている。

そして、近年において酒井直樹は、「翻訳（通訳）」は「話し手と聞き手にもともとあった非連続性を連続化し認知可能なものとする実践」であり、非共約的な複数の言語や文化の共存状態から、暫定的な関係を制作する諸活動が「翻訳」であるとした<sup>1)</sup>。

本稿における「通訳性」は通常の翻訳・通訳の理解を踏まえる以上に、例えばクラスの代表や各国の首脳など、各々の共同体を代表する人物がもつ「翻訳・通訳性」、そして、文学作品が映画化された際の「翻訳・通訳性」、作曲家の曲が指揮者によって解

釈され、演奏される時の「翻訳・通訳性」、さらにその曲を聴いた画家が絵画として表現した場合の「翻訳・通訳性」なども含む、広義の「翻訳・通訳」を指すものとする。

では、何故『抱擁家族』の三輪俊介の「通訳性」に注目する必要があるのか、について述べてみたい。

小島信夫の『抱擁家族』は、「ジョージ」の「アメリカ性」によって「三輪家」さらには「日本」のアイデンティティが崩壊していく過程を描いた作品として享受されてきた傾向がある。先行論については後に詳しく検討するが、特に江藤淳が『成熟と喪失——母“の崩壊”——の中で指摘した内容、つまり時子は自らの招いた「アメリカ」（ジョージ）ゆえに、自身の「母性」のみならず、農耕社会における母子相姦的な関係（時子と俊介の関係）をも破壊してしまったとする分析が、『抱擁家族』の読み方の方向性を決めたことは否定できない。

しかし、『抱擁家族』はジョージと時子の「性関係」によって「三輪家」が崩壊されていく姿を描いたスキヤンダラスな小説なのだろうか。もつと端的に言うくと、江藤が論を進めていく上で前提としているジョージと時子の「情事」は、はたして実際に行われたのであろうか。作品中、「性関係」の有無について当事者の二人が直接語る場面はなく、「真相」は俊介の「通訳」を通してのみ語られる。つまり、「事件」は俊介の「通訳」によってはじめて浮上したとも言えるが、そうすると、ここで登場する俊介はどのような立場に立っているのか、俊介の「通訳性」あるいは「翻訳性」はどのような機能を持ち、何を喚起させるのか、そして「事件の真相」とどう関わるのか、なども当然問われるべきだと思う。

本稿は、以上のような俊介の「翻訳・通訳性」と関わる諸問題を問い、『抱擁家族』を読みなおしてみることを目的とする。

## II 先行研究の検討

『抱擁家族』は昭和40年7月『群像』に発表された長編小説である。

発表当時の文芸時評からも伺えるように、『抱擁家族』は「崩壊家族」、「家長失格小説」として評価された。例えば、平野謙（『今月の小説（上）』『毎日新聞』昭和40年6月23日）は、『抱擁家族』は亭主（俊介）のコケンも威厳も最後まで取り戻すことなく終っており、この作品を「男性のもつコッケイさ」、「みじめな男性のすがたを強調」したものと評価する。<sup>20</sup>『抱擁家族』とは「崩壊家族」の諸像を反転させたものであるとする指摘は、江藤淳の文芸時評（『朝日新聞』昭和40年6月24日）<sup>21</sup>からも、山本健吉・福永武彦・本多秋五らによる対談（『創作合評』『群像』昭和40年8月）<sup>22</sup>からも確認できる。このような論調は後にも見うけられるが、桂秀実の「家Ⅱ系の破壊—小島信夫論」（『群像』昭和40年8月）<sup>23</sup>や、早川雅之の「小島信夫『抱擁家族』論」（『近代文学論集』14号 昭和63年11月）<sup>24</sup>などがそれであると言える。

そして、『抱擁家族』を論じるに当たって、看過できないものは江藤淳の『成熟と喪失—母“の崩壊—』（河出書房 昭和40年9月5日）であろう。江藤が『成熟と喪失』の中で述べているものは、図式的に言うところ、「アメリカ」という「近代」の乱入によって「日本」の「母性」が荒廃していく戦後日本の状況であり、そして「母の崩壊」によって「日本」は逆に「成熟」していくと

いう内容である。絶対的な「他者」、つまり「アメリカ」の到来によって「日本」の「国体」の「喪失」を訴える江藤の立場は、後に記す「落葉の掃き寄せ」IV—『静かなる空』と戦後の空間』（『文学界』昭和46年3月）や「閉ざされた言語空間」（『諸君』昭和47年2月）、『一九四六年憲法—その拘束』（昭和45年10月25日 文芸春秋）まで続いている。

さて、『抱擁家族』と関連して言えば、江藤は、『抱擁家族』の時子は自らの招いた「アメリカ」（ジョージ）ゆえに、自身の「母性」のみならず、農耕社会における母子相姦的な関係（時子と俊介の関係）をも破壊してしまったとした。言い換えれば、「父性」をバックグラウンドとして持っている「運命的な stranger」の「ジョージ」が、「女性的」、「母性的」な「日本」の農耕社会に侵入した時、時子は「娼婦」と変貌し、そこに残るのは「人工的」な「セントラルヒーティング」の家しかないと江藤は指摘する。

占領が法的に終結したとき、日本人にはもう「父」はどこにもいなかった。そこには超越的なもの、「天」にかわるべきものはまったく不在であった。もしその残像があれば、それは「恥かしい」敗北の記憶として躍起になって否定された。この過程<sup>25</sup>はまさしく農耕社会の「自然」Ⅱ「母性」が、「置き去りにされた」者の不安と恥辱感から懸命に破壊されたのと表裏一体をなしている。先ほどいったように、今や日本人には「父」もなければ「母」もない。そこには人工的な環境だけが日に日に拡大されて、人々を生きながら枯死させて行くだけである。<sup>26</sup>このような江藤の『抱擁家族』の解釈は作家小島信夫の作意と

至近距離にあったと言える。というのも小島信夫は『抱擁家族』ノート」において「アメリカ人をもつてくることは、じやまになりはせぬか。これは現代の問題、我国の文化の内容からして、かえって必要。俊介の家の建て方、外国ふうの家とも関連する。我々の倫理的支柱のなさともつながりをもたせればいい」<sup>\*8</sup>と述べており、両者は「ジョージ」を「アメリカ」あるいは「近代」の記号として読みとっているのである。

江藤淳の明快な図式は『抱擁家族』を読む際の一つの方向性を提示したともいえるが、彼の「母“の崩壊”説を補強するような論文は『成熟と喪失』以降も多数見られる。例えば、羽原譲の「ヴァニッシングポイント文学 1976 —「抱擁家族」から「限りなく透明に近いブルー」へ—」(『群像』昭和57年5月)<sup>\*9</sup>や、千石英世の「最後の性—『抱擁家族』における神の問題」(大橋健三郎他『小島信夫をめぐる文学の現在』福武書店 1985年7月20日)<sup>\*10</sup>そして大橋健三郎の『抱擁家族』について—笑劇による悲劇—(講談社文芸文庫『抱擁家族』解説 1988年2月10日)<sup>\*11</sup>、富岡幸一郎の「空っぽの「近代」—『英霊の声』と『抱擁家族』—」(『新潮』平成2年12月)<sup>\*12</sup>などは、江藤が示した準拠枠に入る論文であると言える。

その他、俊介の「翻訳・通訳性」に注目した論文が目下のことろ二編あるが、一つは松本和也の「〈ガン〉・〈翻訳〉・『抱擁家族』—小島信夫をめぐる試論—」(『立教大学日本文学』1999年7月)であり、いま一つは広瀬正浩の「通訳者がいることの意味—言語関係をめぐる『抱擁家族』の問題性—」(『名古屋大学国語国文学』2000年12月)である。

まず、松本和也は、「俊介の〈翻訳〉による身の立て方」は「部外」、つまり「アメリカ」の存在によって成立するものであるとする。言い換えれば、俊介の「翻訳」行為を「日本」と「アメリカ」という共同体の成立の後に行われるものとしているのである。そして氏は、「事件」をめぐる三者が対面する場面について、「〈翻訳〉をする俊介—通訳は、時子とジョージの間で、まるで部外者のようであるが、(略)それゆえにここに神—国家を欠いた非家父長的俊介を見出すのも由なしとはしない」とするが、この指摘は江藤淳の「母“の崩壊”説の延長線にあるものと言えらる。そして、広瀬正浩論は、酒井直樹の『日本思想という問題—翻訳と主体』を援用しながら、俊介の「通訳」に積極的に注目した論である。この論については後に言及することにした。

### III 英語講師／アメリカ文化についての「講演家」／

#### 「通訳」としての俊介

#### III—i 「翻訳・通訳」されたアメリカ文化

##### —「セントラルヒーティング」の家

二、三日して俊介は主婦相手の座談会をかねた講演会にかけた。大学の講師をしながら外国文学の翻訳をしている俊介は、日本文学の翻訳紹介者として二年前にアメリカの大学に出張して一年間滞在した。アメリカから帰ってから、俊介はアメリカの生活について語るうちに、いつのまにか、こういうものにひっぱり出されるようになっていた。<sup>\*13</sup>

夕刻、俊介は「外国の家庭生活について」という小さな講演をした。<sup>\*14</sup>

『抱擁家族』の三輪俊介は、大学の講師でもあり、外国文学の「翻訳家」、アメリカの生活について語る「講演家」でもある。そして彼の講演の主な内容は、「外国の家庭生活」、「夫婦の道」などであるようだ。

本文中「ケネディは殺されるし、鶴見の二重衝撃事故で百何十人あつという間に死ぬし」という箇所があるが、こういうところを踏まえると、三輪家の人物が生きる時代は昭和38年前後であるとと言える。

すでに昭和31年の『経済白書』に見られる「もはや戦後ではない」のスローガンや昭和35年の『経済白書』における「消費革命」などの言葉は、戦争の影が次第に薄くなり、物質的にも豊かになった時代の雰囲気を漂わせる。そして、三種の神器の普及（例えば、冷蔵庫の場合、昭和40年に普及率50%を越え、昭和53年には99%に達している。洗濯機の場合、昭和31年には全国で6.3%だった普及率が昭和35年に26.1%、昭和37年に44.1%と進み、昭和38年には51.5%と、全家庭の半数が洗濯機を備えるようになった<sup>\*15</sup>）やアメリカンホームドラマの放映によって更に「アメリカンカルチャー」は可視化される。三浦展も「欲望する家族・欲望された家族」（上野千鶴子編『色と欲』小学館1996年10月20日）の中で指摘しているように、「戦後の日本人が、みずからの家族を形作る際に、たとえ無意識にであれそのモデルにして

きたイメージの原体験」は、アメリカン・ホームドラマ（例えば「パパは何でも知っている」に代表される昭和30年代後半のアメリカン・ホームドラマ）である。<sup>\*16</sup>

定まった形としての「外国の生活」や「アメリカの住まい」が「西洋」の規範として流通する際、同時に反対側には「日本の家」、「日本の家庭」のジャンルも浮かび上がる。戦後まもなく出版された『これからのすまい』（西山卯三 相模書房 昭和22年9月10日）<sup>\*17</sup>や『ヒューマニズムの建築』（浜口隆一 雄鶏社 昭和22年12月10日）<sup>\*18</sup>、『新住宅読本』（早川文夫 相模書房 昭和25年8月30日）<sup>\*19</sup>、雑誌『新住宅』などに見られる傾向の一つは、「日本の帝国主義的国家主義」によって妨げられた「近代建築」の復活と、見習うに価するアメリカ的生活への接近を進めるものである。

ここで作品の時間軸と合わせて昭和38年前後に注目してみよう。

雑誌『新住宅』において小林敦子は「アメリカンホームライフ見習い記」を連載しているが、彼女は連載の動機を「私が学んできたあちらでのよいことが、日本の生活改善に何か少しでもお役に立てば、望外の幸と思っている」<sup>\*20</sup>と述べている。彼女が「アメリカンホームライフ」を「あちらでのよいこと」と表現していることから推察できるのは、「アメリカンホームライフ」を「日本の家庭生活」、つまり「こちらでのわるいこと」と対置させていることである。そして、雑誌『暮しの手帳』においても同様なことが言える。例えば、「自分で家を建てるひとのために」（昭和38年秋号）というタイトルの連載物には露骨に日本の住宅文化の「劣

等性」を指摘している文章が見られる。例えば、「台所だけを例にとってみても、戦前と戦後では黒と白ぐらいな、たいへんな変わり方です。むかしの（狭い）台所では、もう役に立たなくなっています」や「いまもこういう家（戦前の不便な家、言いかえれば、台所も居間も風呂も狭い家）に住んでいる人は、ただ先祖の作った家の番人をしているようなものです」、「まして、百年百五十年もむかしに作られた家にはもう見た目だけの美しさしか残っていません」<sup>\*21</sup> などなど。

同雑誌の昭和33年秋号にも「戦前の古い家を作りなおす」という記事が見られるが、そこには「寝室はなく、台所はせまく、相当大きな家でも風呂場のない」「戦前の家」を「居間をなるべく広くし」、「部屋をなるべく独立させて、特に寝室を個室に」する「西洋的」、「近代」な家に建て直すプランが紹介されている<sup>\*22</sup>。つまり、以上の言説には清算されるべき「日本の前近代」と取り入れるべき「アメリカの近代」が対を成していると言える。そして、取り入れるべき「西洋」文明の究極が「セントラルヒーティング」の家として表象される時、「日本」と「アメリカ」の範疇は確定されてしまうように見える。

「こんど作るのなら、どうしたってアメリカ式のセントラル・ヒーティングというやつにしくつちや」（略）

「夏は冷房にしくつちや。こんなルーム・クーラーみたいなもんじゃなくて、もっと性能がいいのにしくつちや」

「避暑に行かなくともすむし、僕も仕事ができるし、みんなよく寝られるだろうな」<sup>\*23</sup>

しかし、俊介は時子の提案に口調を合わせるものの、心の中では「自然の風がいいのだ」、「ホテルのような家に住むことは、金の都合が付き、誰の迷惑にもならぬとしても、世間に対して、居心地のいいものではない」という。そして、アメリカである農家を訪れたとき、その主人が言った言葉「ルーム・クーラーのよなもの、私は好かない。自然の風を入れよ」を思い出す。

ここからは、「通訳される」ものと「通訳する」ものの間の亀裂を読み取ることができる。アメリカの住宅全てが「ルーム・クーラー」完備の「合理的な近代建築」であるはずはなく、アメリカ人の誰もが「合理的な近代建築」を好むとも言いきれない。しかし、「アメリカの住まい」とされる内容は、こちら側の人間にとつてあるべき姿として変形され、流用されてしまうのである<sup>\*24</sup>。「セントラル・ヒーティング」の家を訪問した「アメリカ人」のジョージが、その家に馴染めず、「食事中にいかにもきゆうくつそうに溜息をついた」場面は、ジョージは「アメリカ人」であるけれど、「アメリカ人」がジョージではないことを物語っている。

「セントラル・ヒーティング」の家のみならず、彼が雑誌に書いたとされる「夫婦の道」についても同様なことが言える。彼は、あるべき夫婦像を「外国の家庭生活」から形作り、そこで「妻を満足させるように、妻の悩みに耳をすませるように」と書いた。しかし、読者の反響は「あなたのを読んで、三輪氏はこんなことばかり書いていないで、もっと面白いことを書けばいいのに」というものであった。つまり、俊介が提案する「夫婦の道」の内容は「アメリカ」や「西洋」に限ったものでもないゆえ、陳腐に

聞こえてしまう。また、俊介の描くアメリカの主婦は、「家の中を整理したり、みがいたり、机の上のゴミをなくしたり、掃除機やシャワーをつかうばかりじゃなく、ちゃんとやってくれ」る者として記されているが、この内容も取り立てて言うほどのことでもないのである。というのも、家の整理やみがき、ゴミ出しなどは、一般に考えられている主婦の仕事と特別に異なるものでもないからである。

閉域した空間として「アメリカ」が存在し、またその対項として「日本」を想定した時、俊介は「アメリカ」を「翻訳・通訳」することができた。つまり、俊介は「アメリカ」と「日本」をそれぞれ独立した空間として立ち上げること成功したのである。しかし、「アメリカ」を「翻訳・通訳」するとき、「翻訳・通訳される」ものと「翻訳・通訳する」もの間における亀裂や距離も自覚する。「アメリカ文化」を「翻訳・通訳」する行為が、「日本人」としての属性を確定した後、「過去遡行的」に行われることに彼が気付いていたかどうかは別として、俊介の「文化通訳」は、「アメリカ」と「日本」を立ち上げると同時に、その境界線の揺らぎも、さらには境界線の可変性も示したものであったと言える。

### III—ii 俊介の「通訳」が介在する場

冒頭にも言及したが、江藤淳が『成熟と喪失―母“の崩壊”』という論を進めていく上で前提としているジョージと時子の「性関係」は、はたして実際に行われたのであろうか。

家政婦みちよの告げ口によりジョージと時子の関係を知らされた俊介は、時子に真相を質す。時子は、「あんたとみちよの二人

がそういえば、私がほんとうにそうだったということになるじゃないの」、「おかしいね。どうして彼がウソをつくんだろう」、「あんたがそういうえばそういう気がする」といい、ジョージとの出来事を否定する。時子が単に偽っていないことは「俊介は、この女はとぼけているのではない。それが困るのだ」という個所からも確認できる。

そこで、ジョージと時子、俊介の三人は顔を合わせるようになるが、ここで俊介が介入する理由は、ジョージと時子はコミュニケーションが不可能な関係として想定されているからである。言い換えれば、俊介の登場は、ジョージと時子を共通項のない「アメリカ」と「日本」、「英語」と「日本語」という明確な枠にはめ込むところから起因する。

しかし、すでに広瀬正浩の指摘もあつたように<sup>25</sup>、ジョージと時子は「話しに通じない」<sup>26</sup> 関係ではないのである。例えば、「彼女（時子）はジョージのウインクにこたえた。ウインクするところをみると、自分が話題になつていふことをこの男は知っているのだ」という場面や俊介の不在中、ジョージの表情をめぐって家族が盛りあがる場面を読む時、ジョージと時子の間にコミュニケーションが成立しないとするのは不適合であると言える。むしろ、作品中には、「均質言語」を共有していると見なされる時子と俊介の間のディスコミュニケーションが目立つ。俊介がアメリカへ行く前に子供のことで二人が相談する時、時子が「あなたって分らない人ね」といい、いきなり泣き出す場面や「彼（俊介）は必ずしもひとの話をきかぬ方ではないが、彼女の話はきかなかつた」とする記述などは、俊介と時子が「均質言語」を共有しているも

の、意思疎通までには至っていないことを物語る。以上のような諸場面は、江藤淳が俊介と時子は当然「話の通じる」関係であり、「同質」的な「農耕社会」「日本」に属する関係と見なすことと裏腹であると言える。

そして、もう一つ注意したいのは、「情事」の内容について当事者の二人が直接語る場面はなく、「通訳」者の俊介によつてのみ語られることである。つまり、読者がジョージと時子の出来事について情報を得るには、俊介の「解釈」を頼りにするしかない。ここで、俊介の「通訳」を介して三人が対面する場面を見てみよう。

「よくこの人にきいてちょうだい。どうしていいふらしたのか、どうしてありもしないことをいうのか」

俊介がジョージに向つて時子の言葉を伝えた。

「ノウ、ノウ、あなたは彼女のいうことを信じるの」

「どちらも信じていない。いいふらしたのは、どうしてだ」

「彼女が狂っているからこわい」

「狂っている？こわい？よし」

俊介は時子をなじるように、そのジョージの言葉を彼女に伝えた。

「それなら、きみ、僕はここで彼女があのとまのときのことをくわしく話す、きみが強制されたかどうか知るためだ、違っていたら、それをいうのだな」

「オーケー」

と相手はいった。俊介はその夜のこゝろを一つ一つ時子の口から

いわせては、相手に通訳しはじめた。それに対する答えは、一つ一つみんなくいちがっていた。長い間、時子がベッドにいて愛撫をうけたことだけはまちがいがなかった。<sup>27</sup>

「事件」の内容はジョージからも時子からも語られず、この場面を読む限り、読者は「一つ一つみんなくいちがっていた。長い間、時子がベッドにいて愛撫をうけたことだけはまちがいがなかった」ことしか確認できない。そして「英語」も「日本語」も理解し、両方を話し得る俊介の「通訳」は、どのレベルで行われているのかも確認できない。ここで私は「正しい翻訳・通訳」「発話者の意図を捉えた翻訳・通訳」などを想定しているわけではない。「正しい翻訳・通訳」を判定する基準はどこにもないからである。ただ、ジョージと時子が発するメッセージが俊介によつて置換される時、その内容は両者にどのように響き、どのように働きかけているのかが不透明であることを指摘したい。要するに、「どちらも信じて」いられないのは読者の方であるかもしれない。

一方、俊介は二つの言語において一対一の対応は不可能であることには自覚的であると言える。山岸が英語を日本語に「翻訳」する作業において、「英語の過去形と日本語の過去形とはニュアンスが違う」場合、どう訳すればいいのかを俊介に相談する場面がある。

山岸は俊介があたえている翻訳の仕事のことでききにきたのだ。訳語のことで、英語の過去形と日本語の過去形とはニュアンスが違う、ということはいいに来たのだ。それは翻訳の初歩



で、もし、それをさけたいのなら、動詞のテンスのことで解決しようと思わずに、文章ぜんたいで、なるべく近づけるようにするしか方法がない、と俊介がいった。とつぜん彼は元氣になった。<sup>\*28</sup>

山岸が一つ概念について二つの言語の意味は同一であることを前提としているに対し、俊介は二つの言語の間には「非共約的」なものがあると認知しているように思われる。そして、「動詞のテンス」に捕われず、「文章ぜんたいで、なるべく近づけるようにする」行為はもう一つの「表出」であり、もう一つの「解釈」になりかねない。実際、俊介はジョージのいう「Nothing happened」の解釈において、「性関係」そのものがなかったと受け取る他方、場合によっては「こういう満足がなかった」という意味で解釈するなど、その「翻訳」行為がいかに流動的であることを示唆している。

「翻訳・通訳」者としての俊介の登場は、事件の真相の解明への期待を膨らませるものがある。というのも、彼はジョージと時子の言語を理解し得る特権を持っているからである。しかし、当時は二人の声が直接伝わる場面がないこと、俊介の「通訳」のレベルが確認できないこと、そして俊介の「通訳」の内容はもうひとつの解釈になりかねない、という三つのことから読者は真相の解明を断念せざるを得ない。

要は、俊介が言っているように、「女房が何か男としかしたから、といて、それをいけないという根拠はありはしない。ただ不快なだけだ。としたら、そのとき、この不快さをとり除く方

法があれば、それでいいということにもなる」かもしれない。

#### IV おわりに

『抱擁家族』を評価し、論じる際に、一つのパターンとして広く共有されてきた「崩壊家族」、「成熟と喪失」母「の崩壊」、「空っぽの「近代」」などの言説は、時子とジョージを安易に「日本」と「アメリカ」の対抗図式に回収させることを基底としている。そして、ジョージと時子の「性関係」（場合によっては「姦通」とも表記される）は紛れもない「事実」とされている。

しかし、以上で検討したように、俊介の「通訳」を介した後、ジョージと時子は「アメリカ人」と「日本人」として立ち向かうことになった。そして、アメリカ文化を「翻訳・通訳」し、ジョージと時子の間で「通訳」する俊介の「通訳・翻訳性」は、「翻訳・通訳」される内容を思い描く俊介によって立ち上げられること、また「翻訳・通訳」はもうひとつの解釈を生む可能性を孕んでいることを物語っている。

少なくとも、ジョージと時子は意思疎通が不可能な関係ではなく、また解釈によっては「性関係」は有らしめることも「Nothing happened」と判定することも可能である。むしろ、肝要なのは、俊介の「不快」感が解消できるかできないかではないだろうか。そうすると、時子の相手が「アメリカ人」のジョージではなくてもこの小説は成立するのである。

にもかかわらず、ジョージを「アメリカ」あるいは「近代」の記号として捉え、「ゴウ・バック・ホーム・ヤンキー」の響きが小説の最後まで残るように感じるの、やはり俊介の「翻訳・通

訳性」がもたらした結果であると思う。つまり、俊介の「文化通訳」によって立ち上がった「アメリカ文化」は「日本文化」と対立した形で提示され、また俊介の「通訳」はジョージと時子をして独立した共同体の人間同士として立ち向かわせる。俊介の「翻訳・通訳性」によって提示されるこの二項対立的な「アメリカ」と「日本」は、『抱擁家族』をめぐる言説の自明な前提となっており、読者をしてジョージを「アメリカ」「近代」として読ませるのである。

しかし、何度も繰り返して言っているように、俊介の「翻訳・通訳」は彼が「日本人」としての資格を獲得した後に行われたものであり、また、俊介は自分の「翻訳・通訳性」を通して「アメリカ」と「日本」の境界線は随時変更可能なものであることを示唆しているのである。

自ら「俊介」を名乗り、「日本人」を名乗る人々によって、『抱擁家族』は陳腐に享受されてきたように思われる。

### 【注】

- \*1 酒井直樹『日本思想という問題―翻訳と主体』岩波書店 1997年3月14日 p.26
- \*2 「(111)で作者の強調しているのは、良人というものの滑稽なすがたであり、男性というもののみじめなすがたである。(略)亭主のコケンだけではない、父親の威厳も最後まで回復しないままに終わる。」
- \*3 「抱擁家族」は、妻のアメリカ兵との姦通にきわまった混乱、無

秩序から家庭を再建しようとする話だといえるかも知れない。」

\*4 「本多ぼくは相当いい作品だろうと思うが、「抱擁家族」とあるのは「崩壊家族」みたいな感じだけれど、どうかね？」 p.171

「山本：家長失格の小説といってもいいかもしれない。」 p.171

\*5 『抱擁家族』の冒頭は、主人公の三輪俊介が「家」という物語を意識するところから始まっている。三輪俊介は典型的な物語（アメリカ式の「家」）を建てたはずなのだが、その物語がすでに崩壊の危機に瀕していることを自覚しているのだ。」 p.233

\*6 「長い歴史に根ざした血縁的（家族制度）が解体し、（略）男女の対関係をどう建て直すか、母が女に変貌し家庭の平和と紐帯を破り棄てたとき、また夫がその性的機能を弱め同時に家父長的権威にかわる世帯主としての権威と指導力を喪失したとき、（略）どこでそれを求めていったらいいのか、そういう戦後日本の過渡期の混乱と課題をこの小説は先取りしている。」 p.52

\*7 江藤淳『成熟と喪失―母“の崩壊”』河出書房 昭和42年6月5日 p.149

\*8 『小島信夫全集6』講談社 昭和46年7月28日 p.105

\*9 羽原は、三輪俊介は「家族制度もモラルもない、いわば「戦後の家」の父であり夫」であるが、しかし、ジョージに対して「ゴウ・バック・ホーム・ヤンキー」と叫びしむる日本人としての気概はあるとする。しかし、村上龍に至ると、そういう気概は一切なくなると述べる。 p.485

\*10 「そして神を容れる空っぽの容器だけが東京郊外の暗闇に立っている。(略) 俊介はそのなかで目に見えない壁にぶつかり、身心両面にわたって靴ズレを起こすかのように右往左往するばかりだ。息子の良一はその容器を捨てた。娘のノリ子はその容器に押しつぶされな

「だろうか。」 p.156

\*11 「敗戦の荒廃、その空白への西洋、特にアメリカの文物、制度、思想の浸入によって、日本人の「倫理的支柱」が一度はへし折れたことは、誰しもが認めるところであろう。しかも、その西洋の思想や制度はわが国では容易に根づかず、物質文明の流入と相俟って、むしろ日本人の心の抛り所、いわゆる自己本体の喪失と、その結果としての混沌をもたらしたと言わなければならない。」 p.275

\*12 「日本の戦後、さらには近代のもたらした歪みと精神的な空洞を『抱擁家族』ほど赤裸々に描き出した小説は他にない。」 p.221

\*13 『小島信夫全集3』講談社 昭和46年2月28日 p.8

\*14 前掲書 p.27

\*15 石川弘義他『日本風俗じてん・アメリカンカルチャー①』三省堂1981年10月15日 p.115

\*16 昭和30年代後半に流行したアメリカン・ホームドラマとしては以下のようなものがあげられる。

・「パパは何でも知ってる」

・「Father Knows Best」NTV 1958年8月放送開始

・「クーバーちゃん」

・「Leave It to Beaver」NTV 1959年1月放送開始

・「うちのママは世界1」

・「The Donna Reed Show」フジテレビ 1959年3月放送開始

・「アイ・ラブ・ルーシー」

・「I Love Lucy」NHK 1959年4月放送開始

・「なにしてんのパパ」

・「The Dennis O'Keefe Show」TBS 1960年7月放送開始

\*17 「此の様な多量の住宅が失われ、それが又新しく建てられねばな

らないということは、一方過去の混乱した非合理的、非能率的な生活様式を、その重要な支えであった我々の古い住まい生活を、根本的に改める絶好の機会である」(p.6)

\*18 「このような日本の帝国主義的国家主義の敗退ということは将来における近代建築の発展のために決定的な好条件となるものである。」 p.135

\*19 「洋風の室内では、家具やカーテンの色彩の調和が大切ですが、欧米の婦人は、自分のたしなみとして、いろいろ室内の調和を工夫するということです。日本婦人でも、着物や帯の柄には、相当気をつかい、又、すぐれた趣味を持っている人が居るので、日常生活する場所の意匠くらは、自分で工夫するように心掛けたいものです。」 p.130

\*20 『新住宅』昭和38年4月 p.80

\*21 『暮しの手帳』昭和35年 秋号 p.205～206

\*22 『暮しの手帳』昭和37年 秋号 p.93

\*23 『小島信夫全集3』講談社 昭和46年2月28日 p.52

\*24 「アメリカンホームライフ見習い記(6)」(『新住宅』昭和38年9月)において小林敦子は「W氏夫妻の生活(典型的な中流共働き勤め人)」を紹介している。「三種の神器」、つまり冷蔵庫、洗濯機、掃除機などはアメリカ人の誰もが使用していると思いがちだが、小林のレポートによると、「如何に電気器具が各家庭に普及しているアメリカといえども、まだまだ洗濯機、ドライアーをそなえている家庭は多くあるというものでない」ようである。アメリカにおいての生活レベルは千差万別であるにもかかわらず、その内容はアメリカ像を思い描く側によって、「近代」的で快適、能率の高いものとして画一化される傾向がある。

\*25 広瀬正浩『通訳者がいることの意味―言語関係をめぐる『抱擁家族』の問題性』（『名古屋大学国語国文学』2000年12月）

「〈英語／日本語〉の二項対立的では説明されない言語関係がジョージと時子の間にはある。それは少なくとも両者のコミュニケーションを支えるものになっている。そこに俊介の通訳が介入を語ること、換言すれば語り手が通訳者俊介の介入を語ること、〈英語／日本語〉という言語関係が見出されることになる。」 p.35

\*26 江藤淳『成熟と喪失―母の崩壊』河出書房 1967年6月5日

「皮肉なことに『抱擁家族』の作者は、このジョージという「近代」を時子と話の通じない人間に描いている。彼は日本語をほとんど解さず、時子は英語を知らないのである。つまり時子にとってジョージを理解することは不要でなければ無意味である。彼はただ「近代」の象徴であり、青春、幸福、あるいは美しい王子等々でありさえすればよい。」 p.63

\*28\*27 『小島信夫全集3』講談社 昭和46年2月28日 p.33

前掲書 p.138